

## コラム 人生課長の独り言～一歩進めるためのヒント～

### ノートの余白に宿る「あなたの価値」

机間指導の時、先生は何を見えていますか？正解を書いている子、手が止まっている子……。つい「指導」したくなりますが、そこをぐっと堪えて「価値付け」の場にしてみませんか。

「この図、分かりやすいね」「さっきと違う考え方を見つけたんだね」。先生のそんな一言が、挙手できない子の心に「自分はここにいていいんだ」「自分の考えには価値があるんだ」という自己存在の灯をともします。授業は、単なる知識の習得の場ではありません。一人ひとりの「出番」と「居場所」を作る、最高の発達支持的生徒指導の舞台なのです。

机間指導の時、先生のまなざしは常に、挙手や発表はできないけれど自らのノート（課題）に真剣に向き合っている『沈黙の挑戦者』にも注がなければいけません。先生の何気ないかつ温かい振る舞いが、その児童生徒の試行錯誤の跡や、消しゴムの跡を具体的に価値付けることにつながります。毎日の授業の中でのそのような先生の姿勢が、「先生は自分の努力をそのまま見てくれている」という、自己存在の確かな灯をともし大事な支援にほかなりません。

教室のICT環境が整い、手元の端末上でも児童生徒の取組状況は把握できる時代になりましたが、毎日の授業の中での一人ひとりの児童生徒の見取りに、生徒指導の温かい視点を加える。これこそが『誰一人取り残さない』岡山県の授業づくりの神髄だと思うのです。（高橋）

#### <参考>生徒指導の視点を意識した授業づくりセルフチェックリスト

1. 【めあて（導入）】 本時のめあては、「～を調べる（活動）」ではなく、「～を説明できる（達成された児童生徒の姿）」で提示されているか？
2. 【クリア基準】 「どうなれば達成か」の段階的なクリア基準が、児童生徒に可視化・共有されているか？
3. 【机間指導】 正誤の確認だけでなく、発表されていないノートの記述や努力の過程（消しゴムの跡など）に価値付けを行っているか？
4. 【話し合い】 話し合う前に対話のルールを再確認し、話し合い後の「自己変容」を振り返らせる余白があるか？
5. 【外枠とゆだね】 「誰も傷つけない言葉を使う」など外枠となるルールを教師が絶対に保持した上で、活動の選択を児童生徒に委ねているか？



# 生徒指導 Leaflet @ OKAYAMA リーフ

誰一人取り残されない岡山県の教育に向けて

## 生徒指導と学習指導の一体化② ～自己存在感を育む「机間指導」～

生徒指導と学習指導の一体化についてのイメージを深めるために、生徒指導の実践上の4つの視点をいかした取組について、具体例を紹介します。  
もちろん、他の取組もたくさんありますが、授業の中でよく行われるものに絞って考えてみます。  
まずは、教師の基本スキルのひとつ「机間指導」を自己存在感の感受への配慮という視点で読み解いてみましょう。

## Q.「机間指導」の価値を生徒指導の視点で考えるとどうなりますか？

A.「授業5（ファイブ）」における要素③「目標の達成度を確認する」では「机間指導」を行います。その際、単に児童生徒の答えの正誤を確認するだけでなく、一人ひとりの児童生徒を「個」として見取り、それぞれの価値を認める場とすることで、児童生徒の「自己存在感」を高めることができます。

### 自己存在感を育む「机間指導」のポイント

#### ポイント①：「発表されていない表現」を見つけ、価値付ける

机間指導の最大のポイントは、挙手や発言には至っていないものの、ノートに書かれた優れた考えや、独自の視点を見つけ出すことです。

＜具体例＞

全体での交流の前に机を回り、「〇〇さんのこの書き方、面白い視点だね」「図を使うと分かりやすいね」と個別に声をかけます。

＜効果＞

「先生は自分のことを見てくれている」「自分の考えには価値がある」という実感を抱かせ、自己存在感を高めます。

#### ポイント②：回る順番や声の大きさを意図的に変える

学級全体の状態を見つつ、支援が必要な児童生徒や、考えを広げたい児童生徒に対して意図的なアプローチを行います。

＜具体例＞

つまずいている児童生徒へ：そばに寄り添い、小さな声でヒントを出したり、既習事項の掲示（学習の足跡）を見るよう促したりして、自力で解決できるよう支援します。

理解の早い児童生徒へ：「別の方法でも説明できるかな？」と、さらなる思考を促す問いかけをします。

「正解」探しに  
縛られない



『学習指導のスタンダード』の  
ダウンロードはコチラ

＜効果＞

個々の習得状況に合わせた丁寧な関わりが、児童生徒に「自分は大切にされている」という安心感を与えます。

#### ポイント③：「結果」ではなく「過程」を認め、称賛する

正解を書いているかどうかだけでなく、考えようとしているプロセスや、試行錯誤の跡に注目します。

＜具体例＞

「あきらめずに何度も計算し直しているね」「消しゴムのあとがたくさんあるのは、一生懸命考えた証拠だね」と、努力の過程を具体的な言葉で認めます。

＜効果＞

失敗を恐れずに挑戦できる「安全・安心な風土」が醸成され、自己有能感（自己存在感の一部）の育成につながります。

#### ポイント④：個の考えを「全体」の学びへとつなげる

机間指導で把握した個人の考えを、比較・検討の場面で意図的に指名したり、板書に位置付けたりします。

＜具体例＞

「さっき机を回っている時に、△△さんがノートに書いていた考えを紹介してもいいかな？」と全体に投げかけます。

＜効果＞

自分の意見がクラス全体の学びに貢献しているという実感が、集団の中での「居場所」と「出番」を確立させ、強い自己存在感を生み出します。

このように、教師が「個」を見つめる眼差しを持って机間指導を行うことが、授業における発達支持的生徒指導の実践となります。

### POINT

一人ひとりを見つめる教師の「まなざし」がポイント



『提要』のダウンロード  
はコチラ

一人ひとりを  
大切にした  
かわり